

サマリヤ会だより

社会福祉法人 青十字サマリヤ会
理事長 熊谷 豊次
館長 齊藤 和夫
札幌市南区藤野 4 条 3 丁目 8 番 18 号
TEL 011-591-1921 FAX 011-591-8414

2010 年 11 月発行

私の歩んできた道

サマリヤ会理事長

熊谷 豊次

私が名寄市立総合病院神経精神科医長時代(1961(昭和36)年9月、名寄市立総合病院神経精神科医長に赴任)、当時教科書問題で有名だった家永三郎先生の岩波新書「我が小学校長の回顧」を読み、ヒントを与えられました。東京では土地がないので教室の下を駐車場にしていたという記録でした。

北海道内で初めての鉄筋コンクリート造りで3階に体育館を新設し、温室を備えた体育館を設け、体育館に調理室を備えました。体育館から出て右側に小上がりのある断酒会の場所を設け、廊下に出て左側は作業療法室で七宝焼きの釜も備えました。

二階の踊り場には(社会に開く階段)と名付け、外から体育館に入れるようにしました。一方、一枚のドアで一階の強化ガラスで保護室は興奮患者が入室するときはトイレを開放し洗面所を保護します。更に隣の部屋はトイレ・洗面所を備えた老人室にしました。当時精神病院に潜入しスクープしていた朝日新聞の大熊記者が朝日新聞のコラムで私が新設した体育館や保護室等見に来てくれ紹介してくれました。こんなことから砂川市立総合病院も名寄市立総合病院を参考にして、さらに4階に体育館を新設したそうです。

その頃、アルコール依存症に対しては、名寄断酒会を結成し指導活動をしていました。

その関係から当時、宣教師カニングハム先生が財団

法人青十字サマリヤ館を建設され、パークホテル2階での竣工式に招かれました。

名寄総合病院精神神経科医長時代数名の患者を青十字サマリヤ館にお願いしたことがあります。

名寄在職20年目の1980(昭和55)年3月退職、その年の4月から社会福祉法人(後に北翔会)重度心身障害児者施設札幌あゆみの園園長に就任。

1988(昭和63)年10月医療法人社団西の里恵仁会病院精神科医長、1990(平成2)年同病院理事長院長、その後、2008(平成20)年2月に個人開業をし、北広島メンタルクリニック院長。同年4月に医療法人社団翔嶺館北広島メンタルクリニック院長、2010(平成22)年7月からは再度、個人開業をし、北広島メンタルクリニック院長として働いています。

私は1989(平成元)年10月から前青十字サマリヤ会の柴川正義理事長の後任として理事長に就任し、22年が経ちます。その間、念願だった青十字サマリヤ会の財団法人から社会福祉法人への移行。さらに、老朽化していた就労継続支援B型施設ふじの共同作業所の増改築工事が済みました。

1993(平成5)年に大崎前館長が企画されたサマリヤ館セミナーも今年で18回目を迎えます。

今までの私の歩みを振り返りますと、皆様との出会いに感謝の思いでいっぱいです。これからの残された最大の課題は、老朽化したグループホーム青十字サマリヤ館の建て替え計画です。当初の予定では、今年度中に建て替える計画でしたが、資金不足のため計画が進まず、来年6月まで募金活動を継続する認可を頂きました。今後とも、引き続き青十字サマリヤ会の働きを覚えていただき、皆様方のご支援、ご協力を頂ければ幸いです。

踏んだ石の痛みを知る

サマリヤ館館長 齊藤 和夫

いつも、青十字サマリヤ館を思い、支えてくださっていることを心より感謝申し上げます。

昨年より、北海道の許可を得て、青十字サマリヤ館の建替えの為に募金活動をしています。建替え総工費予算は8000万円を超え、現在までの資金状況は募金350万円と自己資金が1200万と独立行政法人福祉医療機構からの福祉貸付(予定)2000万円を合わせると建替え資金3550万円となり、残りの5450万円が現在の目標募金金額です。エベレスト登頂に例えると、標高8,848mで現在地から頂上まであと3分の2が目標となりました。頂上までは遥かに遠い道のりですが、目標募金金額まで一步一步頂上を目指して、歩むしかありません。多くの青十字サマリヤ館サポーターの皆さまの助けにより、前進させていただいていることを感謝します。今まで募金をして下さった方々の為にも必ず、登頂成功のお知らせを届けたいと思っております。お祈りください。

今回の題「踏んだ石の痛みを知る」は募金活動の一環である、青十字サマリヤ館を支援して下さる教会でメッセージさせていただいた題でもあります。この言葉は、伊波敏男著「花に逢はん」のあとがきにあった言葉です。『私は沖縄県で生まれ、ハンセン病を病み、二六年間、社会福祉分野で障害者の職業問題を生業としてきた。私の人生には、いつも「少数者」の課題が横たわっていた。そのため、いつの間にか私の発想の基点には、ひとつの習性性が身についてしまった。それは、「石を踏んだ足の痛みではなく、踏んだ石の痛み」である。』

この社会の中で声にしても聞いてもらえず、見えていても目にかけてもらえない存在を踏まれた石に譬えています。私自身も自分の靴の中に入った石つぶ(自分の身におきた小さな問題)に不満を抱き、自分が踏んできた石(大きな問題)があったにも関わらず、無理解のゆえに感じなかった事柄があった事をこの伊波氏の著書を通して教えられました。

青十字サマリヤ館の原点である「隣り人」の精神がそこにあります。依存症者の声にならない思いや表面的な見栄えのため受け止めてもらえなかった現実が北海道にもありました。依存症に対する無理解による偏見や差別に翻って孤独の殻に身を隠し怯えていた依存症者。依存症の回復は一人では不可能に近く、仲間や隣人の存在が、依存症からの回復に大きな力となります。青十字サマリヤ館創立者のR、カニングハム師の思いもそこにあったのではないのでしょうか。開設当時の青十字サマリヤ館の特徴でもある、当番制のプログラムによる、スタッフとの共同生活。朝昼夕の食事を共にすること、大家族のような生活の中で感じる、その日の出来事。時に孤独を感じ、時に小さな幸せを感じ、時に人を憎み、時に人を許す。そんな日常生活の中から、人間関係の回復の一步が始まるのではないのでしょうか。さらにスタッフの生き方、そのものも大切な要素となりうると考えます。

立派な振る舞いだけではなく、失敗した時の正直な生き方や無力の中に希望を見ずえる生き方など、共に回復し続ける日常生活が大切なメッセージです。

11月に入り、今は漬物作りの時期で、今年も入館者とスタッフが共に漬物に挑戦しています。その協力し努力する姿を見ていると、とても微笑ましく感じます。自家製の不揃いの大根を不揃いの切り方で切り、わいわい言いながら最高傑作を自負し、何度も何度も味見をする自称漬物名人たちは最高です。たとえそれが失敗作に終わったとしても、価値のある共同作業であると思うのです。失敗作も大切な財産であり、大成功でも、もちろん素晴らしい財産となるでしょう。このような日常生活が出来るのも、孤独の殻から抜け出した一步があったからこそと思います。

今後も青十字サマリヤ館が依存症からの回復の一步を踏み出す方々の、その歩みを支える施設として「石を踏んだ足の痛みではなく、踏んだ石の痛み」の使命を忘れず共に歩んで行きたいと願います。

最後に回復のために共に歩んでくれる、大切なスタッフや関係者の皆さんを思うとき、伊波敏男著「花に逢はん」の中に登場する、青木恵哉伝道師の事が思い出されます。青木恵哉伝道師はハンセン病への偏見や差別と闘って生涯を全うした方で、伊波敏男さんとの

最後の再会の場面が書かれてあり、『1957（昭和32）年、私が出会った青木伝道師は、すでに自らの両足と、両手指を失っていた。まるで、沖縄のハンセン病患者救済と引き換えにでもしたかのように、後遺症の重さを身一杯に背負っていた。青木伝道師と私は並んで祈った。後日、私はその時のお礼を、納骨堂に隣接する「青木恵哉頌徳碑」に合掌することでしか伝えられなかった。その碑には、氏自身の句が彫り込まれている。

「痛みへて、真珠となりし貝の春」

スタッフや関係者の働きを思い、一人でも多くの回復を願いつつ 2010年11月

“与えられること”

生活支援員 山本 克二

去年三月にサマリヤ館を退職し、浜頓別にある特別養護老人ホームで、介護の仕事を与えられました。アルコール依存症であることを告げ、働かせていただきました。最初の三ヶ月は根性でした。久しぶりに自分の中で根性という思いを持ちました。全てがはじめてでした。相変わらず元気に走り回っていて、大声で笑っていませんでした。仕事にも慣れ、夜勤を与えられた夜、一人のおばあさんを叩きたいという感情が一瞬湧きました。時間に追われ、スタッフの目を気にし、自分の思い通りにしないことに怒りを感じたのです。

その後、タバコを吸いに外へ出て、涙が出てきました。「なんも回復してねえなあ」「札幌へ帰りたいなあ」「大した人間でないよ」そんなことがあってから、ずいぶん楽にゆっくり仕事ができるようになりました。じいちゃん、ばあちゃんにいつも私の方が先に元気をもらっていました。

私の回復していないところはもう一つあります。夜勤の時、スタッフの一人が私の好きな、いなり寿司や魚の煮つけを作ってきてくれるのです。最高にうれしいのですが、素直に受け入れられないのです。人にはやさしくできても、特に健常者からやさしくされるこ

とには、抵抗があるのです。回復にはほど遠いのです。そんな私ですが、じいちゃん、ばあちゃん、スタッフから良くされ、街にも慣れ、もう一つの仕事である、道北地方へのメッセージ活動をはじめました。だけど広い。あまりに遠い。稚内も名寄もバスの便数は少ないし、夜はまったく走っていない状況で、車が必要か、といろいろ作戦を練っていた頃「サマリヤ館へ戻ってきてくれないか。」という言葉が与えられました。幸せな想いと、今はまだ離れたくないという想いとがありましたが、不思議と逆らうものは何もありませんでした。今までの人生、ずっと逆らって生きてきたように思います。必要とするものは、与えられるものではなく、自分で勝ち取るものだと思っていました。気が小さく、弱虫で、大した人間でもなくせに、虚勢をはって生きてきたのでしょうか。

十月中旬に、施設長へ退職をお願いし、12月20日まで勤務することになりました。ずいぶんみんなと仲良くなったので、だんだん感傷的になってきた頃、温泉で送別会を与えられました。やっぱりやさしくされることは、あまり好きではありませんでしたが、そこで自分の病気の話をして、お礼を言いました。私にはこれしか出来ないと想っていました。12月20日になり、その日はなんか静かに仕事をしている自分がいました。黙って静かに一礼をして、半ベそをかきながら帰ってきました。毎日のように温泉に行っていたので、その夜も温泉に行き、白鳥を見て、気持ちの切り替えをしました。思い出深い九月月でした。12月24日に札幌に来ました。今までで最高のアパートが与えられました。そして、12月28日にサマリヤ館スタッフが与えられました。

酒、薬、ギャンブルをやめるプログラムを少しだけ真剣にはじめてから、いろんなものが与えられました。あの頃は何も見えなかった。何も見えないことにモヤモヤし、過去にしがみついていた泣き、自分を責めることに酔い、すっかり年老いてしまいました。髪の毛もなくなり、腰も痛く、物忘れもひどくなりました。与えられたことに逆らうことなく、生きて行こうと想います。また、逃げ出すかもしれませんが、それは逃げ出すのではなく、新たに与えられたものに従って生きていくだけです。と言い訳をしている自分です。

奇跡だー！

生活支援員 岡田 純

サマリヤ館に勤めて10年が過ぎました。

1948年に札幌の市立病院で7月14日朝に未熟児で生まれ、1日持てばいいと言われてたらしい。看護のおかみで生き返った。もうこの時から奇跡が起っていた。

生まれてきて、俺はなにかわからないけど、斜めに歩いて来たみたいだ。高校時代から、薬を飲んで毎日通学していた。夜になるとススキノに通って酒を飲み歩いていた。けんかもしょっちゅうして警察に補導されてた。学校では先生に注意をされ、説教され、おうふくびんたをくらってゆるしてくれる。なんとか卒業できた。親の商売（ラーメン屋・喫茶店）の1軒をまかされてやりだす。

もうその頃は、朝の酒が始まっていた。何年間は朝の一杯で夜ススキノに行くまでもっていた。年を追うごとに朝の一杯ですまなくなった。一杯のんで昼の忙しくなる前に一杯、昼が終わって一杯。もうだんだんひどくなってきた。精神的にも経済的にも身体的にもドラッグアウトしていた。

28歳頃から血反吐を吐いて内科に入院、それから5年間内科の入退院、何回したかもわからない。その後に精神科に入れられる。

また5年、精神科を5回入退院をする。最後の病院でAAとアルコール施設に会う。とりあえず酒が止まる。昼は施設に通い夜はAAに通いだした。38歳後半だ。最後の精神病院を退院して、AAのグループにつながる。酒を止めて店をつぶし、破産をした。仕事を探して働き出す。AAの中でスポンサーを見つけ、色々相談したいな報告をしながら歩み始めた。

初め、給食センター。1年くらい勤めて転職する。青果に勤める。あわせて10年くらい社会で勤めてそんな頃サマリヤ館から誘いがあって、自分がゆくゆく希望してた事がすこし早めに来たようだった。

サマリヤ館に勤めて2005年に5年おきにあるAAの大会がカナダのトロントで開かれた。70周年記念に参加した。初めて外国に行った。世界中のAAの仲間に来て感動した。すばらしかった。サマリヤ館に勤めてたくさん、たくさん色々なことがあった。2000年のクリスマスに今は天国に行っている母親と洗礼を藤野福音キリスト教会で授かる。その後に兄が苦小牧福音キリスト教会で洗礼を受ける。うちの家族はクリスチャン家族になりました。

まさか、まさか 結婚できるとは！

「2年目です」

生活支援員 葛森 祐二

サマリヤ館に勤務させていただいて2年目になります。

「アルコール・薬物・ギャンブル依存症の社会復帰施設」に当事者スタッフとしての勤務、自分にはどうかな？と思いながら、不安と期待を感じつつもあつという間の2年弱でした。アルコールを止めて5年を過ぎ、社会人として酒のない人生をまともに生きるのが初めてという状況です。

アルコールは精神病院の保護室で止まりました。退院後もAAのミーティングに通うことで止まっています。少しではありますが社会に復帰して自立の道に向かっているつもりですが、根本的な自分の問題に向き合う時期が来たなども、本当に自分の過去の清算をする時期に入ったとも思います。

自分だけ良ければ周りには関係なし、自分の都合だけで生きてきた人生。言葉は丁寧、物腰は柔らかく、一見行儀の良い人には見えますが実は狂気の生き方をしてきた自分。そんな生き方の結果多くの信用を失い、行き着いたのは精神病院の保護室でした。

いまだかつてない体の苦しみ(離脱症状)、苦しかった！本当に苦しかった！実はその後に精神的な苦しみ、痛みが襲ってきて、「絶望、社会死、全てを投出したい・・・」等々、微かに残った良心の呵責から飲むことも逃げることも出来ない、いまだに適切な表現が見

つからない辛い状態でした。

そんなどうしようもない時にAAの仲間が私の入院した病院にメッセージに来て、笑顔で「また一緒にやろう」と言ってくれました。体は病院のベッドの上、帰る家はある、妻は面倒を見てくれる、でも心の行き場がなかった自分でしたが、AAミーティングに行くことで少しずつ開放感と居場所を感じました。

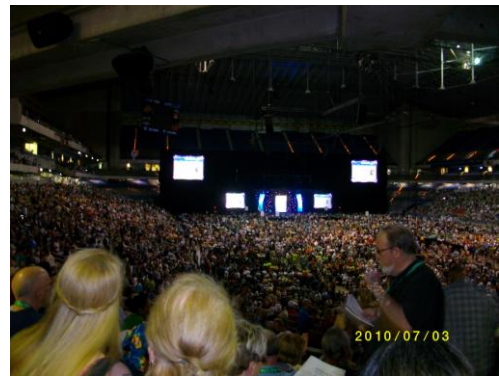
AAミーティングでは「飲んでいたときの自分の話を正直に話すこと」と「食生活を含む規則正しい生活を心掛ける」と先にアルコールを止めている仲間から言われました。今考えますとサマリヤ館プログラムと共通していると思います。

最初からは出来ませんでしたが、毎日の規則正しい生活とミーティング通い（途中から仕事）を淡々と繰り返す中で、アルコールからの捕らわれ・精神薬（不眠・鬱状態）から少しずつ開放されていく自分を感じました。もちろん家庭生活も少しずつリカバリーの方向に向かって行くようになりました。

そんな時にサマリヤ館にスタッフとしての話があり現在に至っています。今本当に感じるのは、相変わらず狂った生き方を繰り返そうとする自分がいることです。変わらないな！と凹みながら感じつつも、サマリヤ館ミーティング・AAミーティングの中で正直になり、アルコール依存症者であることを認め続けること、プログラムを信じて委ねること、仲間の中で自分の本当の問題に向き合って努力して行くことが解決の方法と思っています。

今年は休暇をいただきAAの生誕 75 周年インターナショナルコンベンション（アメリカ）に行ってきました。世界 90 国から約 6 万人の仲間とフェロシップをしてきました。サンアントニオ空港に着いた瞬間から笑顔・握手・ハグ、ドームでの全体ミーティング「本当に酒を止めて良かった！」「生きていて良かった！」夢のような何者にも変えられない感動と喜びをいただいて帰って来ました。

このような機会を与えて頂き、こんな自分でも考えを聞いてくれ、使ってくれる今の環境「(福) 青十字サマリヤ会」に感謝です。少しでもお手伝いが出来たら・・・と思っています。ありがとうございます。



曇り時々晴れ

生活支援員 佐藤 香愛

作業所の職員になって1年半が経った私。
「もう限界」「もう無理」「どこか遠くに行きたい・・・」
そんなことを思う日々が多かった。
何がそんなに辛いのか？ どうして毎日疲れるのか？
結局自分が小さいからだろう。
同じ状況にあったとしても、ちゃんと前を向いて行ける人もいるのだから。
自分の心ひとつだ。心の在り方で日々の価値が変わる。
困難や問題を「大きくなる為の機会」と捉えるのか、
「うっとおしい嫌なもの」と感じるのか。 ①
嫌なものだと感じる。→ここで成長しようと思う。→

やっぱり無理だと思う。→今は頑張るときだと言いつけさせる！忍耐忍耐・・・モヤモヤどんよりの私②モヤモヤが大きくなりすぎた。号泣雷雨 ③ちょっといいことがある。よっしゃ頑張るか
よって私は「曇り時々晴れ（稀にスクールあり!）」

この繰り返しで今日に至った。

「どこに行っても逃げられないもの。・・・それは自分。」
「あちこち掘り返して人生を無駄にするより、足元掘れ！そこに泉がある。」

「心こそ大切。」

折れそうになると、胸に刻んだこれらの言葉を思い起こして自分を奮い立たせる。

逃げようとして色々妄想を始める自分を現実連れ戻す。

・・・こんなことばかり書いて辛い毎日ばかりだったみたいだが、実はそうでもない。

作業所の皆の笑顔。さりげない一言。入館者さんが元気になる姿。

優しく見守り、聞いてくれるスタッフ。

ここに連れてきて幸せだなあと心底思うことも多々あることを忘れてはいけない。

皆さん、いつもありがとうございます。

・・・1年後の私、もう少し晴れが多くなるといいな。

雨は潤いと恵みとなって・・・

本当に生きづらかった

生活支援員 土谷 俊男

夜の仕事が一段落してほっとするのが午後9時過ぎで、それからやっと自分の時間という生活が2年続いた。9時過ぎてから、おもむろにラジオを聞いてウィスキーを飲みだす。4日でボトル1本が空き、習慣的な飲酒はここから始まった。27～28歳には肝臓が悪くなっていたが、もうこのころは酒は止められなかった。嫁さんはあきれ家にはいない。もう酒のことは誰にも止めなさいと言われることはないと思ひ、これで安心して飲めると思ったが、もう体が受け付けなくなっていた。内科に入院して、体調が良くなって家に帰ると

すぐに又飲みだす。2～3日も飲むとご飯が食べられなくなる。職場に嘘を言って朝から飲む。復職させてもらえない。休職扱いで何とか給料はもらえたので、月1回給料をもらいに行くがその度に、早く職場を止めるように上司に言われた。帰りのタクシーに乗る前に酒屋に寄ってウィスキーを買って後ろの座席で飲みだす。上司の言葉を思い出しては腹を立て、「なんで俺が苦しんでいるのに分かってくれないのか」と・・・生きていた中で、やっと酒を飲まなければ生きられなかった生きづらさが少し見えてきた。自分の性格上の欠点や短所、自分には短所なんてない、悪いのは回りだと思っていた。高慢さ、プライド、思うようにならないとすぐ人を恨む、「あの野郎、この野郎」・・・今は酒を飲む理由は何もない。飲んでいての頃の考えや行動が起きそうになると、修正が出来る。コンビニや酒の売り場を通る時、一瞬心がドキッとする。こんなものですよ。私の回復は。今サマリヤのお手伝いをさせていただいて、自分の昔の姿がそこにあり、仲間の中に身を置く喜びを感じさせていただいています。一年間のサマリヤでの訓練、夜のAAミーティング、多くの仲間たちの中で残された人生、酒なしの生活を送りたいと思っています。

サマリヤ館に入館して

マッチ

やるなら今しかない。このタイミングを逃したら、あとはない。2010年4月半ば 旭山病院の山家院長の回診の折、サマリヤ館入館への強い勧めがあった時、そう思った。その時私は「えーっ サマリヤですか？ 少し考えさせてください。」と返事は保留したものの、もう心の中では入館を決めていた様に思う。旭山病院だけで、この三年間に四回も入退院を繰り返してきたのだから・・・。退院すればすぐ、その日のうちに飲んでしまう。入院中は院内のARP、AAメッセージM、断酒例会等にも、積極的に参加させて貰っているのにである。

もう、その頃は自分が信じられなかった。また、退院すればすぐ飲んでしまいそうな自分が恐くもあつたし、また精神病院の門を潜る。そう遠くない未来の姿が目

見えていたからである。

31歳の秋、度重なる飲酒のトラブルに依り内科でアルコール性肝炎と診断され入院。一ヶ月で職場復帰したが、翌、昭和63年3月には、14年のサラリーマン生活に終止符を打たなければならなくなり、十年連れ添った妻とも、じきに小学校へ上がる長女とも別れ、初めての精神病院へ入院、あとはお決まりの転落コースで、10回の入退院、6回の刑務所の入退所——全部、酒が原因——である。

次の院長回診の時には「入館してみます。」自分でも判る程か細い声で言っていた。

今、サマリヤ館に入館させて貰って、もうすぐ半年、毎日のサマリヤミーティング、夜のAA、漸く、遅ればせながら、道は開けてきた。AAで言う「HOW」——正直さ、開かれた心、意欲——自分にも備わってきたと思う今日この頃。「飲まないで生きられる!!」「やるなら今しかない!!」神様、私にお与えください。自分に変えられないものを受け入れる落ち着きを。変えられるものは変えていく勇気を……。

ありがとう、もうこの生き方しか、自分には残っていない。AAの中で……仲間の中で……。

たんこに学ぶ

世話人 齊藤 千恵子

私のところに友だちから近況Faxが届きました。その後、ある集会にいっしょに行こうと約束したのですが、まもなく他の人から友だちが精神的に不安定になり多くの人たちに迷惑をかけていたことがわかりました。集会の前日、友だちが入院したことを他の人から教えてもらい、本人のためにもよかったとほっとしたのです。

集会の日の午後、本人からのメールが入りました。「発熱のため今日はいけなくなりました。残念です」と。この言葉を見たとき、とても淋しい気持ちになったのです。本当のことを言えない友の淋しさを思っていました。そして、その後正直にいけないのは私の中に正直に言えさせないものがあるのではないかと思うようになりました。

サマリヤ館には15年たつ老犬がいます。名前は“たんこ”といます。最近は嗅覚の悪さ、目の悪さが目立ちます。(あんたに言われたくないわん)が食欲は旺盛です。(あんたといっしょだワン)三年前かに鎖が外れ、たんこがいなくなってしまった時がありましたが、知っている方がおまわりさんに「サマリヤ館の犬だよ」と教えてくださりパトカーに乗って帰って来たことがありました。それを見た入館者の方が「たんこ お前もか」と言って笑ったことがありました。そんなたんこが、ある時、遠くの方から歩いてくる人を見てしっぽを振り、喜んで吠えているのです。その方はサマリヤ館に何年か前にいた方だったのです。たんこがそれをわかっていて喜んでるのに驚かされました。

また入館してまもなく不調になり入院してしまった方が用事があって電話をしてくきましたが、用事の話が終わった後「たんこは元気ですか？」と聞かれました。サマリヤ館で唯一たんこに心をひらいていたのでしよう。

食欲の他は無欲のたんこ、背伸びをせず、あるがままのたんこに私は教えを受けたいものだと思ってしまうます。

「たんこ 友だちが正直になれなかったのはどうしてかな？」

「ん？わかんない。悩んだら」って言われそうです。

台所チアガール！

炊事スタッフ 山口 眞知子

齊藤館長の時代になってから、夏はソフトボールの練習試合と大会、冬はバレーボールの札家連の大会に、私たち、台所おばさん達もチアガールとして、ピンクのボンボンを持って応援しています。

バレーボールは3年前からの参加で、1年目は1回戦敗退、2年目は1回戦突破、3年目はソフトバレー

初年度、あれよ、あれよと初優勝！

みんなへろへろ、よれよれなのに、どこにそんな強い気力が残っていたのか、不思議でした。

やっぱりおばさん応援隊がいたからかな・・・なんて。

ソフトボールの応援は遠くへも行きます。

三笠ドーム、長沼病院、そして今年の札家連ツドーム大会は、おしい、おしい準優勝でした。

大会時に退館者の元気な姿に会えることも嬉しいことです。

サマリヤ館員、作業所、スタッフの元気でやる気のあるメンバーが、シーズン中は週1～2回、高台公園で練習しています。

10月26日の初雪、しかも大雪(南区だけ)で、公園での練習が出来ず、玄関前でキャッチボール。食事を作りながらみると、寒いし、足場も悪い中、みんな笑顔で楽しそうでした。

ソフトボール大会は昔から参加していたようで、古い賞状が2枚、壁に掛けてありましたが、今年は新しいソフトバレーの優勝と、ソフトボールの準優勝の賞状と集合写真が誇らしげに掛かっています。

さあ、来年のためにチアガールの振り付けもかんがえないと。

すこし 頑張る！

炊事スタッフ 横山 光子

サマリヤ館とのつながりは、食事の手伝い。と言われて来る事になりました。今は作業所とサマリヤ館の2ヶ所ですが みなさんに おいしかったよ！と言われると 気を良くし、楽しく仕事が出来とてもうれしいです。

入館してきた方は 初めはあいさつもしいのですが、ごすことが多いのですが、どんどん変わっていくのが目に見えて明るくなっていき、仲良く話をする様になった頃退館することになり、またもどってきてね！と言えないのがさみしい。喜ばなければならぬのにね。

でも作業所やクリスマス会で会えるとがんばっているんだねとうれしくなります。みなさんのがんばりを見ては、いつもはげまされます。

サマリヤ館に足をきたえるマシーンがあり、沢山がんばると続かない気がしますが、少しがんばると、この私でも続けられそうな気がします。

台所だより

炊事スタッフ 荒木 章子

サマリヤ館の周りには、いろいろな木が生え、草花があり、いながらにして、ちょっとした山荘気分です。台所の窓からも、春は山菜が生えていたり秋はキノコが出ていたりします。今年の春には、“アカゲラ”が、やって来て、その可愛い姿を見せてくれました。その景色を眺めつつ、私は皆さんの食事を作っています。料理は大好きですが、出来上がったものを、皆さんが喜んで、おいしそうに食べて下さることが何よりも嬉しいです。

リクエストに応じてメニューを考えたり調べて作ってみたり。だから世間一般でいうものと違っている事もあると思いますが、誰も文句を言わないので、私としては幸せな事です。人間にとって食べる事は大切だと思っています。入館したばかりの頃は、食欲もなく、元気ありません。だんだん生活にも慣れ、おいしい、あれが食べたい！というようになれば、本当に表情も変わってきて、私たちとも口をきいてくれたりします。その間、じっと見守るスタッフの皆さんの優しい眼差しも、とてもステキです。様々な経験をして、いろいろな経緯で、ここに来られた皆さん。サマリヤ館でしか会うことのない出会いです。その出会いを私は嬉しく思っています。大切にしたいと思っています。皆さんが元気になり、回復していく事が私の願いです。・・・ネズミや時にはへびも現われる自然に満ちた館、サマリヤ館で私は嬉々として食事作りに励みます。これからもよろしく。

かかわる？かかわらない？

事務員 山岸 多美子

2002年3月 事務員としてサマリヤ館への就職が決まったとき、ある方から申し渡されたひとつのことがありました。それは“入館者にかかわってはいけない”ということでした。具体的にはスタッフの許可を得ず、勝手にかかわってはいけないと言うことですが・・・

でも、不思議なことばでしょう？ こんな不思議なことばを聞くと え？何故？という疑問が むくむくとわきあがることでしょう・・・。

でも私は以前、サマリヤ館に入館していたアルコール依存症の方が一所懸命生きようとしている様子を見て、“手助けしてあげなければ”と勘違いして あれこれとかかわって励ましたり、慰めたりはしたもののその方を助けることはできませんでした。その方は“何故自分が助けて欲しいと頼んでいるのに助けてくれないのか？”といいながら 結局はお酒を飲んで亡くなってしまいました。今から 20年ほど前の サマリヤ館にまだAAのプログラムが入っていなかったときの私の失敗談です。

その当時、サマリヤ館の館長だった宇都宮先生に、入館している人が助けを求めてきたり、相談があるのだけど・・・と言って来たりした時は どんな時でもよいから すぐサマリヤ館に連絡して欲しい。勝手に相談にのったり、お金を貸したり、優しい言葉をかけたりしないで欲しい。と言われました。

その頃宇都宮先生は入館者の方と寝起きをともにして、入館者の方が失踪したり、酔って人の家に入ってしまったたり、喧嘩をしたりなどの事件の解決や保護課や警察との交渉に奔走していました。

私は、なぜ助けを求めている依存症の方を助けてはいけないのか？・かかわってはいけないのか？ このことが分からないまま時を過ごし、10数年後に 縁あってサマリヤ館の事務員として勤めることになったのです。

その勤務の最初に、冒頭の申し渡しがありました。

私は無条件にその戒めを守る決心をしました。何故かは分からなかったけれど、過去の自分の失敗から、それがどうしても必要なことと思えたからです。

それから、サマリヤ館の中で 私は事務員として働きながら遠くから 依存症から回復した当事者スタッフと呼ばれるスタッフが 命がかかっている依存症の方々と 文字どおり真剣にかかわっていく姿を見ることになったのです。

アルコール・薬物・ギャンブルが止まらない。命を失うかもしれない状況になっても止まらない。何もかも失うかもしれない状況になっても止まらない。身体が駄目になるまで昼も夜も飲み続けなければ、やり続けなければならない。 身体が、そして頭が飲酒・薬・ギャンブルを欲求する。依存症とはそんな怖い病気です。

スタッフはAAの12ステップという回復プログラムを アルコール・薬物・ギャンブル依存症の人同士で行うミーティングという作業をしながらアルコール・薬物・ギャンブルを飲まない・しないで生きる生き方を身につけています。

それが回復の道ということです。

生き方の誤りを12のステップにのっとって、正直にミーティングの中で話すことによって回復していくというのです。かつてアルコール・薬物を飲んでいて自分・ギャンブルをしていた自分を見つめるという地道な作業が必要だそうです。

そんな難しい作業を入館者の方は来る日も来る日も、年から年中365日続けています。

入館者の方は サマリヤ館のミーティングを午前中又午前・午後と連続で行い、そして夜になると 札幌市内のあちこちで開かれているAAのミーティング会場へ出かけていって “今日1日飲まない。” “今日一日やらない”を毎日毎日、積み重ね続けていくのです。

今、私は、入館者の方と依存症のことでかかわらないで事務の仕事に専念しています。

依存症の方が自立するのを妨げてはいけない、安易な手助けは、命さえ危うくするとうすうす感じ始めているからです。入館者の方が真剣に自立することを目指しているのが少しづつ分かり始めてきたからです。

入館者の方が“自分で解決する” “辛いことがあ

っても一人で立ち向かう” “腹を立てることがあっても人のせいにはしない”

そんな決心をしてミーティングに通い、価値観を正しくもとうと日々努力している姿を見させてもらっているからです。

依存症という病気が ただ優しさの気持ちからくる手助けであったり、世間に対する見栄による手助けであったり、安易な思い付きによる手助けであったりすることから来るかかわりの中では 回復するどころか命さえ落としかねない危険をはらんでいるものであることを 自分がかねてしてしまった失敗を思い起こして学んだからです。 依存症という病気は回復する病気ですが 命がけで飲む・飲まないを 一人一人が自分自身で選択し続けていることを、私がきちんと理解しなければ かかわってはいけないのだと今は思っています。

スタッフは入館者の家族の方によく言っています。

辛いでしょうが 助けなくてください。 家族の方も今が我慢のしどころです。 本人がこれを乗り越えないと又同じことの繰り返しになってしまいます。 自分で気づいていかないと駄目なんです。と

まるで かつて失敗した私に言い聞かせてくれているみたいに聞こえます。

家族の方は 家族なんだから自分が助けなくちゃ と思います。

また、スタッフの指導を受けてじっと回復するのを待っている家族が 時にはアルコール依存症という病気を知らない親戚の方から 助けてもやらないでなんて冷たいことをするのだ と批判されて、もうこれ以上黙って見ていることはできません。と スタッフに辛さをぶつけてくる時もあります。 そんな時スタッフは よく分かりますよ。といいながら 今は見守るしかないんですよ。とやさしく、時には厳しく今が大事であることを伝えて励ましたりしています。

スタッフは 同じ苦しみを経験しているので、今が助ける時かそうでない時かを真剣に見守っています。苦しいのが分かるから本当は助けてやりたいのです。でも じっと見守るのです。

ここで助けると命を失うことを、そして自立できないで又 お酒や薬にたよってしまうのを知っているの

す。自分の命を削る思いで見守っています。

このことを理解し、またかかわることが出来るのは同じ道を通ってきたスタッフ以外いないのを最近少しずつわかる様になってきました。

これが 冒頭のかかわってはいけない。 の意味でした。

スタッフの真剣な入館者の方との対応、家族の方との対応、行政との対応が 私を励ましてくれます。

依存症を知らない人たちに、その病気を理解してもらうことの大切さもサマリヤ館の使命です。そんな使命をおっているサマリヤ館の中で 今私はカカワらないで 事務の仕事をしています。

私がかって失敗したように 依存症から回復したい人の命を結果的に縮める結果になってしまうような、もう少しで乗り越えて自立できるという瀬戸際に手助けしてしまい 回復を遅らせるなどという間違いは私には決して赦されないのです。

かえりみてわたしは今 入館者の方々とカカワらないで スタッフの苦しみや悲しみを横目に、そして、ミーティングに命を預けている人々の傍らで、黙々と事務の仕事をしています。

心の中でひたすら回復していつくれることを祈りつつ。

私は実習生

2010 年秋実習生

私は今、実習で「青十字サマリヤ館」「サマリヤカンパニー」「ふじの共同作業所」に来ています。

グループホーム「青十字サマリヤ館」は、

- 人を知り自己を見つめなおして人間関係の習得を図る。
- 規律ある生活(食生活含む)を通して正しい生活のリズムをつかむ。
- 同じ病気を持つ者との共同生活を通して、病気を知り、助け合う心を養う。

・食事・館内外の清掃当番を担当して、家事の技術を習得し責任感を養う。

アルコール・薬物・ギャンブル依存症者の社会復帰施設です。

最初に来たときにまず“出迎えてくれたのは、番犬のタンコでした。老犬とのことですが、なんとかわいらしい犬でしょう。「来る人をあたたかく出迎えているんだな」と思いました。「青十字サマリヤ館」の食堂の壁には、以前どこかで見たような大きな風景画(写真?)があり、何となく懐かしい様な感じがしました。

ここに入館されている方は、自立訓練「サマリヤ・カンパニー」に通い、午前・午後のそれぞれ2時間、ミーティングに出席されています。私も、午前のミーティングに参加させていただきました。出席者には、回復し、サマリヤ館を退館後、通われている方もいました。基本的には、当事者のみのクローズド・ミーティングであり、「回復者のプログラム」を使用して、行っていきます。毎回テーマを決めて、まずは回復者スタッフが体験を語り、その後一人一人発表していきます。テーマは「アルコール依存症を認める」とか「コントロールを失った」などで自分の今までの体験、考え方など過去を振り返りながら語るなかで、依存症だった自分と向き合い、人生を修復していきたいという真剣な姿勢が伝わってきました。毎日2回、サマリヤ・カンパニーで行われるミーティングは自らを知り、自分の力で立ち直り回復していくための大切な時間なのだと思います。また、当事者、自らが気づき、どのように行動し、実践するかなのだということを学びました。

アルコールを飲みはじめたきっかけは人それぞれですが依存症という病気になってしまい、家族、仕事、お金、そして健康、たくさんものを失ってしまい、また、アルコール依存症は、完治しないと知り、暗い気持ちになりましたが、ここで出会えた仲間は、何ものにもかえがたい宝ではないでしょうか。

就労継続支援(B型) ふじの共同作業所には、サマリヤ館を退館された方以外の方々も通所されています。就労継続支援(B型)は、通所により就労や生活活動

の機会を提供し(雇用契約は結ばない)するとともに、一般就労に必要な知識、能力が高まった者は、一般就労等への移行に向けて支援するところです。

ふじの共同作業所では、木工、ジャム、キャンドル、ステンド、畑など多くの作業を行っていました。

ここに通われているKさんは、ジャム作りの他に木工やステンドグラスも作るとのこと。デザインもオリジナルと誇りを持っておられました。Kさんは以前アルコール依存症で、入退院を繰り返し、サマリヤ館のような施設に入っていたこともある、と話されていました。デイケアに通っていましたが「仕事がしたい。少しでも収入になれば」と、共同作業所へ通われるようになったとのこと。「収入は、ここでの食事代に消えるけど、今は年金ももらえる年になったし、いいさ」と話されていました。ふじの共同作業所へは、『社会とのつながり』『仲間との交流』『生きがいや楽しみ』を求めて来ているとのこと。仕事の量もちょうどいいと満足されていました。共同作業所で作ったものは、バザー等で売るそうですが、どれもていねいに心をこめて作られていると感じました。ここには、指導という言葉はない。スタッフの役割で一番大切なことは、朝、このかぎを開けておくことという言葉が心に残りました。

「青十字サマリヤ館」「サマリヤカンパニー」「ふじの共同作業所」で実習をさせていただき強く感じたことは、徹底した人権の尊重と、ストレングス視点に基づいたエンパワメント支援が自然な形で行われているということです。ストレングスとは、人の強さや健康な部分に焦点を当てて、それを伸ばしていこうとする新しい援助感であり、エンパワメントとは、再び自らの問題解決能力をとり戻していくこと、また引き出ししていくことです。

制度のことは教科書で学べますが、一番大切なことを学ばせていただき、また思い出させていただきました。実習は、まだ半分あるので残りの時間も有意義なものとなるよう多くのことに気づきをして考えたいと思います。よろしく願いいたします。

献品・献金・青十字サマリア館の建て替え寄附金

いつも当会の活動をご支援下さいまして誠にありがとうございます（順不同・敬称略）

2009年10月～2010年10月

【団体】

藤野福音キリスト教会・東栄福音キリスト教会・砂川福音キリスト教会・帯広栄光キリスト教会・栄福音キリスト教会・厚別福音キリスト教会・日本キリスト教会札幌白石教会・日本キリスト教会札幌豊平教会・平岡福音キリスト教会・日本メノナイト帯広キリスト教会・日本キリスト教会札幌北一条教会・日本メノナイト足寄キリスト教会・カトリック真駒内教会・(株)中条・日本キリスト教団真駒内教会・長野病院・札幌羊ヶ丘教会・幌向小羊教会・高森キリスト教会・日本メノナイト上士幌キリスト教会・日本キリスト教会伊達教会・日本キリスト教会北見教会・日本キリスト教会札幌桑園教会・ウェスレアン・ホーリネス教団札幌新生教会・札幌ナザレン教会・倶知安福音キリスト教会・グレースコミュニティ・北見めぐみキリスト教会・日本キリスト教会苫小牧教会・日本メノナイト富良野のぞみキリスト教会・札幌平和の福音教会・本田記念病院・世の光キリスト教会・救世軍札幌小隊・道央佐藤病院・平岸いずみキリスト教会・日本キリスト教会小樽シオン教会・広尾キリスト教会・札幌南福音キリスト教会・北広島福音キリスト教会・もいわ中央保育園・主都福音キリスト教会・EMFサマーキャンプ準備委員会・植苗病院・大江病院・帯広保健所・石井病院・宗谷保健福祉事務所・北海道保健福祉部・藤野地区社会福祉協議会・三番通福音キリスト教会・市立三笠総合病院・北仁会旭山病院・啓生会病院・滝川保健所・苫小牧保健所・石金病院・富良野保健所・紋別保健所・友愛記念病院・五稜会病院・長万部町役場・高台病院・第一回北海道アディクションフォーラム実行委員会・北海道聖公会道東分区婦人の会・

【個人】

貫洞賢治・村田充子・齊藤和夫、千恵子・とおる・中川祐子・相馬のぞみ、ゆりか・鈴木保夫・石川眞由美・鹿野真澄、晴美・坂田誠・大崎久雄・尾藤美恵子・飯野正行、まゆみ・熊谷豊次・柴川正義、明子・谷口清子・大崎良子・貫洞賢治・匿名・磯山巖・新岡キエ・山本光・澤村篤子・齊藤・村田充子・林共栄子・堀田正和・木村貞昭・佐々木至、芙美子・菊地小夜子・竹市利子・佐藤末吉・齊藤翼、響子・小林基人・由貴子・細川亜希子・堀江俊文・黒田迪子・田辺等・橋本清孝・飯田勝彦・今井裕介・根井悦子・益山桂太郎・石田勉・石川幹雄・山谷ゆかり・大沼百合・長谷川直美・シュテックレ・コニー・加藤久美子・斉藤順子・渡辺慶人・渋谷敬子・磯見智子・佐藤由紀子・佐藤隆・内海初子・和田晴美・松尾知子・太田充子・荻野秀二・成田元・藤田毅・佐々木希美枝・長野方紀・平賀俊尚・小林豊・相田一郎・中村和芳・阿部昇・太田耀子・福島亨・山家研司・廣田洋子・出合清・木村初子・松井博嗣・伊藤善也・藤田晃三・佐藤久美子・種田智恵子・藤本佳範・本間眞智子・大田人可・山賀慎一・小倉敬一・金川美千代・木幡千代子・安田ゆかり・相馬剛、孝子・三浦統・笹森秀雄・竹内徳男・田中章二・谷井広樹・川島邦子・世良洋・ペー・ワンジー・気境徹・藤村保文・藤本朱美・横内悟・原田武行・阿部芳克・植松誠・辻野・岡堀・横山多佳子・野村・宮下和之、陽子・枝川宏子・佐藤功、治子・本田典子・数又裕子・丹羽和彦、遥・越山涼子・矢崎弘志・ダルマン・ピーター・松井新世